



Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ

第 80 回演奏会

2017 年 2 月 18 日(土)
府中の森芸術劇場 ウィーンホール

【プログラム】

ベートーヴェン:「レオノーレ」序曲 第 3 番 op.72b

フォーレ:組曲「ペレアスとメリザンド」 op.80

前奏曲
糸を紡ぐ女
シシリエンヌ
メリザンドの死

<休憩>

シューマン:交響曲第4番ニ短調 op.120 初稿版(1841 年版)

第 1 楽章:Andante con moto - Allegro di molto
第 2 楽章:Romanza, Andante
第 3 楽章:Scherzo, Presto - Largo
第 4 楽章:Finale, Allegro vivace

【指揮者プロフィール】



平川 範幸

1987 年福岡県出身。福岡教育大学音楽科卒業。

上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。

桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣氏に師事。また、パーヴォ・ヤルヴィ、湯浅勇治、沼尻竜典の各氏の指揮マスタークラスを受講。

これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

2012 年度、新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京の下で活動する。2013 年度より 2 年間、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎の各氏の下で研鑽を積む。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢を指揮する。また、各地のジュニアオーケストラや学生

オーケストラ、吹奏楽団、合唱団を指揮する。

2015 年度より、上野学園大学非常勤助教。2016 年度より、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督に就任。

【第 80 回演奏会に寄せて】

アンサンブルディマンシュ代表 山口 彰

本日はアンサンブルディマンシュ第 80 回演奏会にお越しいただきありがとうございます。1977 年 1 月の第 1 回演奏会から数えてちょうど 40 年目に第 80 回演奏会を迎えることができました。これもひとえに観客の皆様を始め、数多くの方々のご協力があったからこそ、感謝の気持ちでいっぱいです。

過去 79 回の演奏会を振り返ってみるといろいろな思い出が蘇ります。創立者の山本誠一郎氏の呼びかけで第 1 回はバッハをやりました。第 2 回は、管楽器のメンバー等を増強し室内管弦楽団にしてモーツァルトをやりました。団名もこのときに付けられました。第 7 回で演奏したフォーレ：組曲「マスクとベルガマスク」はそれまで国内での演奏記録が無いとのことで、本邦初演ということになっています。第 10 回はベートーヴェンの「エロイカ」を、第 20 回はブラームスの交響曲第 1 番を演奏しました。第 10 回までの演奏会で取り上げた協奏曲のソリストは全部団員でまかっていました。（モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第 3 番、協奏交響曲 k.297b、ピアノ協奏曲第 23 番、バッハ：ブランデンブルグ協奏曲第 4 番）。

21 回から 40 回はロマン派、近代ものにもレパートリーを広げていった時期でした。その中で谷本美帆さんという素敵なピアニストとの出会いがありました。ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第 5 番「皇帝」(29 回)、ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第 2 番(31 回)、グリーグ：ピアノ協奏曲(33 回)、シューマン：ピアノ協奏曲(38 回)と立て続けに共演しました。33 回演奏会と同じプログラムで香港公演を行いました。香港公演といういまだに語り草になっていることがあります。忙しい仕事の合間を縫った香港公演だったため、集合は現地でしたが、本番当日メイン曲の第一楽章が始まってオーボエの Y 氏がまだ到着していませんでした。第一楽章が終わったとき、舞台そでのドアが開き Y 氏が現れました。ドヴォルザーク「新世界」、第二楽章の有名なコールアングレ(イングリッシュホルン)のソロを吹くために。

41 回から 60 回はプロコフィエフ：交響曲第 1 番「古典」、ショスタコヴィッチ、シベリウス等 20 世紀の音楽にも挑戦しました。高校生の頃から演奏会をお手伝いいただいていた民谷加奈子さん(ヴァイオリン奏者)から音大の後輩、大塚杏奈さん(ヴァイオリニスト)をご紹介いただき、ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第 1 番、ヴェータン：ヴァイオリン協奏曲第 5 番を、その後モーツァルト：協奏交響曲をお 2 人と、さらにホフマイスター：ヴァイオリン協奏曲、ブルッフ：ヴァイオリンとクラリネットのための協奏曲を民谷さんと共演しました。

61 回から 78 回では、「知られざる 1 番シリーズ」としてメンデルスゾーン(65 回)、カリンニコフ(66 回)、ボロディン(67 回)、グノー(68 回)、グラズノフ(69 回)、メユール(71 回)の交響曲第 1 番を取り上げ、シュポア(ベートーヴェンと同時代のヴァイオリニスト、指揮者、作曲家)の交響曲第 3 番(70 回)、ファランク(19 世紀の女性作曲家)の交響曲第 3 番(74 回)等も演奏しました。また、ヴァイオリニスト大塚杏奈さんの師匠である戸澤哲夫氏(東京シティフィルコンサートマスター)と共演したベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲(65 回)では、特にその第 2 楽章のソロヴァイオリンの ppp に痺れながら、共演している喜びを感じることができました。

78 回定期演奏会が終わって間もなく、創立者であり指揮者であった山本氏の退任宣言がありました。幸いにも戸澤氏のご紹介で平川範幸氏に 79 回のタクトを振っていただくことになりました。曲目はメンデルスゾーン：交響曲

第4番「イタリア」1834年改訂版とディマンシュらしくひとひねりました。

今まで、古典派、ロマン派を初め数々の楽曲を経験してきたアンサンブルディマンシュではありますが、平川氏の指導のもと40年目にして生まれ変わろうとしています。長年ついてしまった悪い癖を払拭し、良いところは残しつつ本当の意味で「音楽で会話する」を実践できるオーケストラになりたいと思っています。

【曲目解説】

ベートーヴェン:「レオノーレ」序曲 第3番 op.72b

ベートーヴェンは歌劇「フィデリオ」にふさわしい序曲を作曲するのに苦労し、結果四つの序曲が作曲されました。1805年のウィーンでの初演では、現在では「レオノーレ」序曲第2番と呼ばれる序曲が用いられました。1806年の再演のために「第3番」を作曲し、その後1807年のプラハでの上演のために「第1番」を作曲しました。最終的には、1814年に現在「フィデリオ」序曲として知られる曲が作曲され、その軽快な曲想が四つの序曲のうち最も歌劇の始まりにふさわしく、今日でも実際の歌劇の上演の際にはこの曲が用いられています。

本日演奏する「レオノーレ」序曲第3番は、歌劇の序曲とするにはあまりにも音楽的な内容が充実し過ぎましたが、四つの序曲の中で最もすぐれた序曲といえる傑作で、現在では演奏会用序曲としてオーケストラのコンサートでも単独で演奏される機会の多い曲です。

歌劇「フィデリオ」の舞台は16世紀のスペインのとある監獄で、政敵によって捕えられた夫を救うため、妻のレオノーレが男装しフィデリオという偽名で監獄に忍び込むという夫婦愛の物語です。曲中もっとも印象的なのは、トランペットのファンファーレが二度演奏される場面です。これは劇中で夫を救い出すきっかけとなる大臣の到着を表しています。トランペットの楽譜には一回目は「遠くから」、二回目は「近くから」との指示が書かれています。今日はどこからトランペットの音が聞こえるでしょうか…。

(Trp. K)

フォーレ:組曲「ペレアスとメリザンド」 op.80

「ペレアスとメリザンド」はベルギーの作家モーリス・メーテルリンクが書いた戯曲です。フォーレは、この戯曲をもとに劇の付随音楽として作曲しました。今回演奏する組曲は、その中の4曲をまとめたものです。

1. 前奏曲 2. 糸を紡ぐ女 3. シシリエンヌ 4. メリザンドの死

物語の舞台は中世ヨーロッパの架空の国アルモンド王国。その王太子ゴローがある日森の中で、若く美しいメリザンドと出会います。数日後、二人は結婚しますが、メリザンドはいつしかゴローの弟ペレアスに惹かれるようになり、二人は愛し合うようになります。それを知ったゴローは、怒りのあまり弟のペレアスを剣で殺し、メリザンドにも傷を負わせてしまいます。そして、その傷がもとでメリザンドもペレアスの後を追うように息を引き取ります。

この戯曲は多くの作曲家の創作意欲を刺激したらしく、フォーレ以外にもドビュッシー、シェーンベルク、シベリウスといった作曲家たちが曲を書いています。私はやはりフォーレの作品が一番好きです。特に、フルート吹きには3曲目の「シシリエンヌ」は人気の高い曲です。かなり昔の話になりますが、テレビのCMで当時新日本フィルの首席奏者だった峰岸壮一さんの演奏がバックミュージックで流れて、「シシリエンヌ」は一躍有名になりました。

ディマンシュではこの曲を、第10回、第54回の2回演奏していますが、第80回演奏会にちなみ、作品番号80のこの作品をまた取り上げることにいたしました。新しい指揮者のもと、メーテルリンクの戯曲の世界が音楽でどう表現されていくか、お楽しみください。

(笛吹童子)

シューマン:交響曲第4番二短調 op.120 初稿版(1841年版)

ロベルト・シューマン(1810-1856)は、1841年、第1交響曲「春」を発表した後、小さい交響曲を完成します。この曲は第2交響曲として初演されますが、あまり評価が得られなかったため出版が見送られます。10年後の1851年、彼は第3交響曲の完成後にこの未出版の交響曲の改訂作業に取りかかり、改訂稿を完成させます。この改訂稿は1853年に初演され、その翌年第4交響曲として出版されます。これが現在一般に演奏されている改訂版(1851年版)です。

一方、初稿の方が優れていると考えていたブラームスは、シューマンの死後、指揮者ヴュルナーとともに初稿の校訂作業を進め、初稿を基にした新しい稿を作成します。この稿は、ヴュルナーの指揮で1889年に初演され、1891年に出版されます。これが本日演奏する初稿版(1841年版)です。

改訂版と初稿版とは、第1楽章と第4楽章に大きな違いがありますが、特に管弦楽法(オーケストレーション)の違いが顕著です。改訂版では全体に弦楽器と管楽器を重ね合わせる手法が用いられています。この楽器を重ね

る手法こそが彼の管弦楽法の最大の特色なのですが、常に響きが重厚で単調なため、時に稚拙さを指摘される要因になっています。一方初稿版ではその「シューマンらしさ」はなく、響きが簡素で彼独特の内声部の複雑な動きがより効果的に表れているように思われます。

この交響曲は全楽章切れ目なく続けて演奏され、前の楽章のモチーフなどが後の楽章でも使われて曲全体の統一性を保っています。

第1楽章: Andante con moto - Allegro di molto

ゆっくりした序奏に急速な主部が続きます。主部は 2/4 拍子で八分音符が続く音型ですが、改訂版では十六分音符に書き直されています。つまり初稿版のテンポは改訂版の2倍ということになります。展開部では優美な旋律が出てきますが、その裏でヴィオラと 2nd ヴァイオリンが交互に第一主題のモチーフを繰り返します。ここはこの楽章の聴きどころであり、音楽的に秀逸な部分ですが、改訂版では単純な伴奏に替えられています。演奏に難があることが理由と思われる。

第2楽章: Romanza, Andante

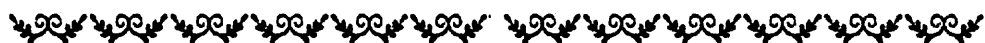
「ロマンツァ(改訂版ではドイツ語のロマンツェ)」と題された三部形式の短い歌です。オーボエとチェロが物悲しい旋律を奏でます。このチェロパートは慣例によりソロで演奏しますが、シューマン自身は二つに分割されたチェロパートのうちのひとつが合奏で演奏するように書いています。これは改訂版も同じです。また、この楽章にはトランペットがなく、3本のトロンボーンが入っていますが、たったの2小節相当(繰返し別)しか吹かないという贅沢な? 使い方をしています。

第3楽章: Scherzo, Presto - Largo

スケルツォとトリオです。トリオでは、第2楽章中間部のソロヴァイオリンのオブリガートが形を変えて 1st ヴァイオリンに出てきます。2度目のトリオの後、コーダに入ると第1楽章のモチーフを基にした次楽章への導入部となります。その最後の部分は、改訂版では大きく替わっています。

第4楽章: Finale, Allegro vivace

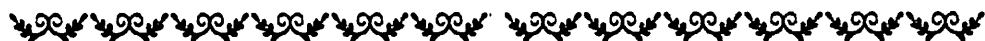
「ターンタタッタ」といういわゆる「シューマンリズム」が曲全体を支配している二長調の明るい曲です。初稿版の基本拍子は 2/4 拍子ですが、改訂版では 4/4 拍子に書き直され、更に第一主題に第1楽章のモチーフが加えられるなど、主題自体かなり変化しています。
(鷹)



【第 80 回メンバー】

第 1 ヴァイオリン	佐藤克哉、三瓶政一、関根佳子、☆時山響子、保坂直紀、本山まり子		
第 2 ヴァイオリン	石嶺寿子、笹沢幸生、中村文樹、西村 実、三井田ひろ子、♪森 未知		
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口 彰		
チェロ	加藤 歩、♪島田亜貴子、寺山知宏、三次摂子		
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮		
フルート	上野京子、徳植俊之	オーボエ	市川亜理、山口高司
クラリネット	浅井昭成、星野尾裕一	ファゴット	越島康太郎、星野未央
ホルン	尾形武一、小磯 治、町田明子、森合利之		
トランペット	磯 由紀江、鴨狩公一、椎木 竜		
トロンボーン	新井恵美、桜田健彦、中野裕司		
ティンパニ	星野武徳	ハーブ	新井愛海
練習指揮	山上孝秋		

☆: コンサートマスター、♪: 弦楽トップ



☆次回の演奏会ご案内☆

日時: 2017 年 9 月 23 日 (土) 14:00 開演 場所: タワーホール船堀
指揮: 平川 範幸 曲目: 未定

詳細は HP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。

※招待券ご希望の方はアンケートにご記入いただくか HP よりお申込みください。

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

ジェレンスキ：ロマンツァ（ウーロージ・カーター管弦楽編曲）

です。



この曲は、ポーランドの作曲家ウラディスワフ・ジェレンスキ（1837-1921）のピアノ四重奏曲 ハ短調 作品 61 の第 2 楽章「ロマンツァ」を管弦楽用に編曲したものです。

ジェレンスキは、1837 年にポーランドのグロトコヴィツ（当時はオーストリア帝国の領土で 1918 年からポーランド領）で生まれ、ワルシャワやクラクフ（同）の音楽院などで後進の指導に当たる傍ら作曲家・ピアニストとして活動していたようです。1921 年にクラクフで亡くなりますが、83 歳という長寿でした。フランスのサン・サーンスは 2 歳上で、亡くなったのが同じ 1921 年なので、正に同期の作曲家と言えます。ちなみにショパンやシューマンは 27 歳上です。

日本では、この作曲家を知っている人、ましてやこの曲（原曲）を聴いたことのある人は少ないと思われます。編曲者は長年ピアノ四重奏曲に特化して音源や楽譜を収集し研究してきましたが、その中で、今から 20 年くらい前にこのピアノ四重奏曲の CD に出会い、特に「ロマンツァ」と題された緩徐楽章に感銘を受けました。そこでこの埋もれた名曲を少しでも多くの人に紹介したいと思ったのですが、ピアノ四重奏曲ではなかなか演奏する機会に恵まれないため、管弦楽用に編曲して演奏することを考えていました。2009 年、たまたまアンサンブル ディマンシュ指揮者からアンコールのために何か編曲して欲しいとの依頼を受け、このロマンツァを管弦楽用に編曲することにしました。それは翌年 1 月、同団第 66 回演奏会のアンコールとして演奏されました。今回は、同オーケストラの 80 回を迎える記念演奏会のアンコールとして再び演奏の機会が得られたため、2009 年版を基に楽器編成を中心に大幅な変更を加えた改訂版（2016 年版）を作成しました。

「ロマンツァ」はゆったりとした抒情的な歌で、形式は特に決まっていますが、三部形式で書かれることが多いようです。プログラムにあるとおり、シューマンの交響曲第 4 番の第 2 楽章は「ロマンツァ」と題されています。シューマンはこのほかにもいくつか「ロマンツァ（又はドイツ語のロマンツェ）」を書いています。この交響曲の初稿を作曲した翌年の 1842 年にはピアノ四重奏曲変ホ長調作品 47 を作曲しています。この曲の第 3 楽章アンダンテ・カンタービレは、明確には題されていませんが「ロマンツァ」です。ジェレンスキのピアノ四重奏曲は、1907 年頃の作品らしいのですが、明らかにシューマンの同曲の影響を受けているようです。特に緩徐楽章はどちらもアンダンテのロマンツァ、3/4 拍子、三部形式、チェロの旋律で始まるなど、多くの共通点を持っています。それが本日のシューマンをメインとした演奏会のアンコール曲に選んだ理由でもあります。



アンサンブル ディマンシュ第 80 回演奏会（2018.02.18）に寄せて
編曲者：ウーロージ・カーター